

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベント教会 - 第四十四

Jeff Pippenger

2026-02-10

第四十四番

1844年、ホワイト夫人が契約の箱を見たとき、第七日安息日の教理は封印が解かれ、彼女に強調して示された。彼女はまた、終末において、受肉の教理が同じ天的な強調を帯びることを記した。第七日安息日は、反型の贖罪日が開始されたときに契約の箱から発せられた特別の光を表し、七年目の安息年は、反型の贖罪日とその終結に至るときに契約の箱から発せられる特別の光を表す。

受肉の教理は、レビ記二十三章における最後の聖会において予表されている。これは、レビ記二十三章の冒頭に置かれた第一の聖会、すなわち第七日の安息日に対するオメガに当たる。かの最初の安息日は神の創造の御力を表し、最後の安息日は神の再創造の御力を表す。最初の安息日は「23」という数で、最後の安息日は「252」という数で表される。

その二つの象徴は、レビ記二十三章の両端をなし、またミラー派の歴史の両端をもなす。1798年はイスラエル北王国に対する二千五百二十年が成就した年であり、二千三百年は1844年10月22日に成就した。ホワイト姉妹が聖所に導かれ、十戒を見つめたとき、彼女は、主がその贖罪の働きを終えようとしておられるときに、キリストに従って至聖所に入る神の終末の民を予表していた。神殿の試験とは、小羊がどこへ行かれてもこれに従うことの試験である。

彼らは女に汚されておらず、童貞である。彼らは小羊が行くところならどこへでも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられた初穂となった。黙示録14:4

預言者としてのホワイト姉妹は、信仰によって至聖所に入った初期の忠実な者たちを描写しており、そのことによって、終末の忠実な者たちが信仰によって至聖所に入り、ついで契約の箱を見つめることの模範を示していた。そこで彼らに照らし出されて見えるのは、受肉の教理、すなわち贖いの完成である。彼らは、覆いをなす二体のケルブが、創造と再創造の二つの安息日を表しているのを見る。彼らは、契約の箱の一方の側に252、他方に23を見だし、それが創造と再創造に即していることを認識する。すなわち、23は神性と人性との婚姻を表し、また252は、人間が神性と結合した人間へと変容することの象徴であると見る。

贖罪所は取り外してはならないと定められていた。ゆえに、ホワイト姉妹がその内部を見たことは特別な啓示であり、預言的に見れば、その描写は彼女が生きた時代よりもむしろ終わりの時代のためのものである。仰ぎ見ることによって、私たちは変えられる。神殿の試験とは、キリストがご自身の純潔なる民を一步一步ご自身の神殿へと導かれることである。預言的真理は、「真夜中の叫び」のメッセージによって照らし出される道に沿う各段階を表している。

ミラー派の四十六年の神殿は一つの段階である。

「23.」（男と女、彼は彼らを創造した）の人間の神殿は一つの階梯である。

キリストが三日のうちにご自身の神殿を建て直すことは一つの段階である。

倉はマラキ書における神殿である。

ネヘミヤは、トビヤの冒瀆から貯蔵庫を清めた。

その神殿は、ヨシヤ王の信仰復興期に大祭司ヒルキヤがモーセの文書を発見した場所であった。

ホワイト姉妹の述べるところによれば、ネヘミヤが冒瀆から清めた神殿は、キリストがその「神聖冒瀆」から二度にわたって清めたのと同じ神殿である。

ミラーの夢の棺は、一つの踏み段であった。

一たびキリストが御自身の忠信なる者たちを至聖所へ導き入れると、彼は（ホワイト姉妹において彼らが表象されているように）彼らを契約の箱のもとへ導き、贖いの蓋を持ち上げて、その内部を見させる。彼らが内部を見ると、受肉の教理と第七日安息日とが、ともに柔らかな光輝を帯びているのを認める。行に行を重ねて、「柔らかな光輝を帯びている」教理を認識する者たちは、信仰によって至聖所に入り、契約の箱の内部を見るホワイト姉妹と一致する。

古代の預言者たちは、自らが生きた時代のため以上に、終末の時代のために、より具体的に語った。これらの古代の預言者たち自身が証しの一部となると、彼らは終末の時代の神の民を表象し、その終末の時代の神の民とは十四万四千人である。ホワイト夫人はおそらく最も重要な古代の預言者である。というのも、彼女のすべての例証は、十四万四千人のオメガの歴史におけるアルファの歴史を指し示しているからである。すべての預言者は残りの民を例証するが、ホワイト夫人はまた、終わりの歴史において一字一句に至るまで成就される始まりの歴史をも表象している。

アルファの基礎的歴史において、ホワイト姉妹は異象のうちに、天にある聖所の至聖所へと導かれた。そこでは、契約の箱の上にある贖いの座-本来取り外してはならない座-が持ち上げられた。そのため、ホワイト姉妹はその内部を見つめることができ、そこで十戒を見た。

至聖所で私は契約の箱を見た。その上部と側面は純金であった。箱の両端には美しいケルブがいて、その翼を広げてそれを覆っていた。彼らの顔は互いに向き合い、うつむいていた。天使たちの間には金の香炉があった。天使たちが立っている箱の上には、きわめてまばゆい栄光があり、そこは神が住まわれる御座のように見えた。イエスは箱のそばに立っておられ、聖徒たちの祈りが御もとに上ると、香炉の香が立ちのぼり、イエスはその香の煙とともに彼らの祈りを御父にささげられた。箱の中には金のマナの壺、芽生えたアロンの杖、そして本のように合わせ閉じることのできる石の板があった。イエスがそれらを開かれると、私はそこに神の指で書かれた十戒を見た。一方の板には四つ、もう一方の板には六つが書かれていた。最初の板の四つは、他の六つよ

りもいっそう明るく輝いていた。だが第四の、すなわち安息日の戒めは、それらすべてにまさって輝いていた。安息日は神の聖なる御名をあげて守るために聖別されていたからである。聖なる安息日は栄光に満ちて見え、その周りを栄光の後光が取り巻いていた。私は、安息日の戒めが十字架に釘づけにされていなかったことを見た。もしそうであったなら、他の九つの戒めも同様であり、私たちは第四の戒めを破るのと同じようにそれらすべてを破る自由があることになる。私は、神が安息日を変えられていないことを見た。神は決して変わらないからである。だが教皇はそれを週の第七日から第一日に変えてしまった。彼は時と律法を変える者であったからである。初期の著作、32。

第七日安息日の教義は、フィラデルフィア的ミラー派運動として始まり、1856年にはラオデキヤ的ミラー派運動へ、さらに1863年にはラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチスト教会へと変容していったミラー派運動の基礎的歴史におけるアルファの教義であった。ホワイト姉妹はまた、十四万四千人のラオデキヤ的運動が十四万四千人のフィラデルフィア的運動へと変容する終わりの時代の歴史において、オメガの教義をも指摘している。アルファとオメガの光は、第七日安息日の教義と受肉の教義によって表象されている。

神と交わる者は、義の太陽の光のうちを歩む。彼らは、神の前で自分の道を墮落させて、贖い主の名を汚すことはない。天の光が彼らを照らす。地上の歴史の終わりに近づくにつれ、キリストおよび彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加わる。彼らは神の目には無限の価値がある。なぜなら彼らは御子と一致しているからである。彼らにとって神の言葉は比類なく美しく、美しい。彼らはその重要性を悟る。真理が彼らに開かれる。受肉の教理は柔らかな光彩を帯びる。聖書こそが、あらゆる神秘を解き明かし、あらゆる困難を解決する鍵であることを彼らは理解する。光を受けることも光のうちを歩むことも望まなかった者たちは、敬虔の奥義を理解することができない。しかし、十字架を負ってイエスに従うことをためらわなかった者たちは、神の光のうちに光を見るであろう。『サザン・ウォッチマン』1905年4月4日。

「受肉の教義」は「敬虔の奥義」とも称される。

そして論争の余地なく、敬虔の奥義は大いなるものです。神は肉において現れ、御霊において義とされ、天使たちに見られ、異邦人に宣べ伝えられ、世において信じられ、栄光のうちに上げられた。テモテへの第一の手紙 3:16。

「奥義」は最後の世代に至るまで隠されており、そのとき忠実な者たちは受肉の教理が第七日安息日のオメガであることを見る。

すなわち、世々および代々にわたり隠されていた奥義が、今や神の聖徒たちに顕された。神は、異邦人の間におけるこの奥義の栄光の豊かさがいかなるものであるかを、彼らに知らしめようとされたのである。すなわち、あなたがたのうちにいますキリスト、栄光の望みである。コロサイ人への手紙 1章26、27節。

「隠されていた」「奥義」について語るのがコロサイ人への手紙一章二十六節であるのはふさわしいことである。しかし、その奥義は末の時代に「明らかにされる」。預言の封印が解かれるとき、預言的な光は顕わにされる。これは、ダニエル書十二章において、一

千二百六十日の終わり、すなわち終わりの時に預言の封印が解かれることによって表されている。代々にわたって隠されてきたその預言は封印を解かれ、その預言は真理であって、封印が解かれるとき、それは日曜法において異邦人に示される「栄光」となる。その奥義とは、あなたがたのうちにあるキリスト、栄光の望みであり、これは第七のラッパが吹き鳴らされる時期に成就する。

しかし、第七の御使いの声が響き、彼がラッパを吹き鳴らし始めるとき、神の奥義は成就する。神がそのしもべである預言者たちに告げられたとおりである。黙示録 10:7

黙示録10章7節において示されているように、第七の月の第十日に第七の天使の声が響き始めたことは、まことにふさわしいことである。第七の天使はまた第三のわざわいとしても表されており、最初の二つのわざわいはイスラームであったから、第三のわざわいがイスラームであることについて二人の証人が与えられていることになる。イスラームのラッパが吹き鳴らされる時、神の奥義は成就する。

第七のラッパの歴史においては、受肉の教理-すなわち、あなたがたのうちにおられるキリストという奥義、あるいは、キリストがみずから人の肉をお取りになったときに示されたような神性と人性の結合-のもとで、十四万四千に列せられる候補者たちは、至聖所に入るために必要な油と信仰を備えているかどうかを試される。彼らがためらうなら、闇が彼らの上に臨むが、小羊がどこへ行かれるにもこれに従うなら、契約の箱の中を見させられるように導かれる。契約の箱において、彼らは第七日安息日の教理と受肉の教理を見出すであろう。

これら二つの教理がいかに重要であっても、私が焦点を当てているのはアルファとオメガの光ではなく、女預言者が、神の民が天の聖所に入り、契約の箱の中を見ていると描写したという点である。終わりの時代における十四万四千人の歴史には、十四万四千人が至聖所へと導き入れられ、開かれた契約の箱を見つめる時点が存在しなければならない。

もし、預言者たちが終わりの日における神の民を指し示していると信ずる信仰と、ホワイト夫人が聖書のほかのすべての預言者と同じ程度に、あらゆる点で靈感を受けていたと信ずる信仰とを有しているなら、先に私が示した適用は真理として受け入れられなければならない。十四万四千人は、ホワイト夫人が、忠実な者たちは1844年10月22日にそうしたと述べているように、信仰によって、キリストに従って至聖所に入らなければならない。そのとき、信仰によって入ることを拒んだ者たちと、入った者たちという二つの階級が現れた。

私は、あらためてキリストの初臨の告知に目を向けるよう示された。ヨハネは、イエスの道を備えるために、エリヤの霊と力をもって遣わされた。ヨハネの証しを退けた者たちは、イエスの教えから益を受けることがなかった。その到来を予告するメッセージに反対したことによって、彼らは、彼がメシアであることを示す最も確かな証拠を容易に受け入れられない立場に自らを置いた。サタンは、ヨハネのメッセージを拒んだ者たちをさらに先へと駆り立て、キリストをも拒み、十字架につけるに至らせた。こうして彼らは、彼らに天の聖所へ入る道を教えるはずであった五旬節の日の祝福を受けることのできないところに自らを置いてしまった。神殿の幕が裂けたことは、ユダヤ人の犠牲と儀式がもはや受け入れられないことを示していた。大いなる犠牲は

ささげられ、受け入れられた。そして五旬節の日に降った聖霊は、弟子たちの心を地上の聖所から天の聖所へと向けた。そこへは、イエスがご自身の血によって入り、弟子たちにご自身の贖いの効力を注ぐためであった。しかし、ユダヤ人たちは全くの暗闇の中に取り残された。彼らは、救いの計画について持ち得たはずのすべての光を失い、それでもなお、そのむなしい犠牲と供え物に信頼し続けた。天の聖所が地上の聖所にとって代わっていたが、彼らはその変化を何も知らなかった。ゆえに彼らは、聖所におけるキリストの執り成しから益を受けることができなかった。

多くの人々は、ユダヤ人がキリストを退けて十字架につけた歩みを恐怖をもって見つめる。また、主が受けた恥ずべき虐待の歴史を読むとき、自分たちは主を愛しており、ペテロのように主を否認したり、ユダヤ人のように主を十字架につけたりはしなかっただろうと考える。しかし、すべての者の心を読み取られる神は、彼らが抱いていると公言したイエスへの愛を試練におかれた。天のすべては、第一の天使のメッセージがどのように受け入れられるかを、最も深い関心をもって見守った。ところが、イエスを愛すると公言し、十字架の物語を読みながら涙を流した多くの者が、主の来臨の良い知らせを嘲った。彼らはそのメッセージを喜んで受け入れるどころか、それを妄想だと宣言した。彼らは主の現れを愛する者たちを憎み、教会から締め出した。第一のメッセージを退けた者は第二のメッセージによって益を受けることができず、また、信仰によってイエスとともに天の聖所の至聖所に入る備えをさせるはずであった真夜中の叫びによっても益を受けなかった。そして先の二つのメッセージを拒んだことにより、彼らの理解は暗くなり、至聖所への道を示す第三の天使のメッセージの中に光を見いだすことができなくなっている。私は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、名ばかりの諸教会がこれらのメッセージを十字架につけてしまったことを見た。そのため、彼らは至聖所への道を何も知らず、そこでのイエスのとりなしによって益を受けることができない。無益な犠牲をささげたユダヤ人のように、彼らはイエスが去られた区画に無益な祈りをささげる。そしてその欺きに満足したサタンは、宗教的な装いをまとい、彼の力とするしと偽りの不思議をもって働き、これら自称クリスチャンたちの心を自分のほうへと導き、彼らを自分の罠にしっかりとかからせる。

ホワイ夫人は、バプテスマのヨハネとキリストの歴史に見られる、終わりにはユダヤ人が完全な暗闇に置かれるに至った段階的試練の過程を指摘し、それによってミラー派の時代における同一の歴史を例証している。すなわち、それは終末時代の古の女預言者たるホワイ夫人のアルファの歴史である。初めにおける生死を分ける試練は、至聖所に入ることを受け入れるか、これを拒むかをめぐるものであった。これを拒むことは、キリストの歴史において反逆的であったユダヤ人の上に臨んだのと同じ暗闇を、ミラー派の歴史における反逆者たちの上にもたらしした。

イエスは常に、物事の始めをもってその終わりを例証する。それゆえ、ホワイ姉妹が、1844年10月22日の試練に関連して、至聖所へと連れ入れられ、開かれた契約の箱を凝視したとき、この出来事は、十四万四千人が、小羊に従って至聖所に入るのか、あるいは完全な永遠の暗闇へ赴くのかという点で試されることを明らかにしている。この事実は、古代の預言者は、自らが記録された証言の一部となると、終末時代の神の民を例証しているのだと理解する信仰を前提としている。ホワイ姉妹は、その二つの階級をともに例証している。

このような失意のさなか、私の心に深い印象を残す夢を見た。夢の中で、私は多くの人々が群れ集まっている神殿を見た。終わりの時が来るとき、その神殿に身を寄せた者だけが救われ、外にとどまった者は皆、永遠に滅びるのだった。外にいる群衆はそれぞれ思い思いの道を行きながら、神殿に入っていく人々をあざけり、嘲笑し、この安全策は巧妙な欺きであり、実際には避けるべき危険などまったくないのだと言った。彼らは、神殿の囲いの内側へと急ごうとする者を妨げるために、何人かをつかまえることさえした。

嘲笑されるのを恐れて、群衆が散るまで、あるいは彼らに気づかれずに入れるようになるまで待つのが最善だと思った。ところが人の数は減るところか増えていき、手遅れになるのを恐れて、私はあわてて家を出て人波を押し分けて進んだ。神殿に急ぐあまり、私を取り巻く人だかりには目もくれなかった。建物に入ると、その広大な神殿は一本の巨大な柱で支えられており、その柱には、ずたずたにされ血を流す子羊が縛りつけられていた。そこにいた私たちは、この子羊が私たちのゆえに引き裂かれ、打ち傷を負わされたのだとわかっているかのようにだった。神殿に入る者は皆、その前に進み出て自らの罪を告白しなければならなかった。

子羊のすぐ前には高く設けられた座席があり、その上にはとても幸せそうな一団が座っていた。天の光が彼らの顔に輝いているかのように、彼らは神を賛美し、天使の音楽のように思える喜びに満ちた感謝の歌を歌っていた。彼らは子羊の前に来て自分の罪を告白し、赦しを受け、そして今は、何か喜ばしい出来事を喜びに満ちた期待を抱きながら待っていた。

建物に入った後でさえ、私は恐れに襲われ、また、この人々の前で身を低くしなければならぬという羞恥の感覚に囚われた。しかし、私は前進することを強いられているかのように、小羊と対面するために柱のまわりを回り込みつつ、ゆっくりと進んでいた。そのとき、ラッパが鳴り、神殿が震え、集められた聖徒たちから勝利の歓呼が上がり、畏るべき光輝が建物を照らし出し、ついで一切が深い暗黒に沈んだ。喜びに満ちた人々はその輝きとともに皆消え、私は静まり返った夜の恐怖の中に、独り取り残された。私は魂の苦悶のうちに目を覚まし、それが夢であったのだと自らを納得させることがほとんどできなかった。わが破滅の運命はすでに定められ、主の御霊は私から離れ、二度と戻らないかのように思われた。

ほどなくして、私はさらに別の夢を見た。私は両手で顔を覆い、全くの絶望のうちに座り込み、次のように思い巡らしているようであった。「もしイエスが地上におられたなら、私は御もとに行き、その御足もとに身を投げ出して、私のすべての苦しみを申し上げるであろう。イエスは私を退けず、私に憐れみを示してくださるであろう。そうすれば、私は常に彼を愛し、彼に仕えるであろう。」ちょうどそのとき、戸が開き、姿かたちも顔立ちも美しい一人の人物が入って来た。彼は私をあわれむように見つめて言った。「イエスを見たいのか。彼はここにおられる。あなたが望むなら、彼を見ることができる。あなたの持ち物をすべて携え、わたしに従いなさい。」

私はこれを言い尽くしがたい喜びをもって聞き、喜んで身の回りのささやかな持ち物を残らず、愛蔵の小さな飾り物の一つひとつまで拾い集め、導き手に従った。彼は私を、急峻で、見かけ上は脆弱な階段へと導いた。私はその段を上り始めると、彼は、眩暈を起こして転落することのないよう、目を上方にしっかりと据えておくよう戒め

た。この急な上りを登っていた他の多くの者は、頂上に達する前に転落した。

ついに私たちは最後の一段に至り、扉の前に立った。ここで私の案内者は、私が携えてきた一切のものを置いていくようにと指示した。私は喜んでそれらを置いた。すると彼は扉を開き、私に入るようにと告げた。たちまち私はイエスの御前に立っていた。あの美しい御顔を見誤るはずがなかった。あの慈愛と威厳に満ちた表情は、他の誰のものでもありえなかった。その御まなざしが私の上にとどまると、私は直ちに、イエスが私の生涯のあらゆる事情と、私の内なる思いと感情のすべてを熟知しておられることを悟った。

その探るような御まなざしに耐えられないと感じ、わたしはその御まなざしを避けようとしたが、主はほほえみつつ近づき、わたしの頭に御手を置いて、「恐れるな」と言われた。その優しい御声の響きは、かつて経験したことのない喜びをもってわたしの心を震わせた。喜びがあまりに大きく、一言も発することができず、感情に圧倒されてその御足もとにひれ伏した。そこに力なく横たわっているうちに、麗しさと栄光の数々の光景がわたしの前を過ぎていき、わたしは天の安息と平安に至ったかのように思われた。やがて力が戻り、わたしは身を起こした。イエスの慈しみ深い御まなざしはなおわたしに注がれており、その御ほほえみはわたしの魂を喜びで満たした。その御臨在は、聖なる畏敬と、言い尽くしがたい愛をもってわたしを満たした。

私の導き手はそこで戸を開き、私たちは二人とも外へ出た。彼は、私が外に置き去りにしていたすべての物を、再び取り上げるよう命じた。私がそれを済ませると、彼は固く巻かれた緑の紐を私に手渡した。彼はそれを私の心のそばに置くようにと命じ、また、私がイエスを見たいと願うときには、それを懐から取り出して、できる限り目一杯に伸ばすようにと言った。さらに、巻いたまま長く置いておかないようにと戒めた。結び目ができ、伸ばし難くなるといけないからである。私はその紐を心のそばに置き、主を賛美し、出会う人ごとどこでイエスを見いださるかを告げ知らせながら、喜びに満ちてその狭い階段を降りた。この夢は私に希望を与えた。その緑の紐は、私の心において信仰を象徴しており、神に信頼することの美しさと単純さが、私の魂に開けはじめた。『Testimonies』第1巻、27-29頁。

1844年8月17日のエクセターのキャンプ集会の終了から1844年10月22日までの期間は、六十六日であった。その六十六日間は、真夜中の叫びのメッセージが宣べ伝えられた期間を表している。そして、十人の乙女のたとえの文脈においては、当時そのメッセージを宣べ伝えた者たちは油を持つ者たちを表し、当時そのメッセージを宣べ伝えなかった者たちは油を持っていなかった。

そのたとえにおいては、遅延の時期の初めに婚姻が成立した。法的婚姻は成立し、その後、一同は家に帰り、新郎の父が婚姻を成就することを許すかどうかを決するまで待った。第一の婚姻と、真夜中に行われる第二の式との間の不貞は、姦淫と見なされた。この遅延の時期は、新郎の父が、一定の期間にわたり花嫁に何が起こるかを見極めるために待つことに基づいていた。彼女は妊娠していたのか。

父が万事が整ったと判断すると、真夜中の行列が始まった。その行列は、パレスチナの昼間の苛烈な暑さを避けるため、夜に開始された。このため、新婦の侍女、すなわちたとえ話の乙女たちは、婚礼への行列が動き出したことを告げる真夜中の叫びを待ち受けるべ

く、各自のともしびと油の備えを持つことを求められていた。というのも、それは夜に執り行われることになっていたのである。エクセターでは真夜中の叫びが到来し、行列のための油の用意が十分にあったか、なかったか、そのいずれかであった。

彼らとそのメッセージを携えてエクセターを去ったとき、彼らは印を受けた民を象徴していた。ある者は1844年10月22日の婚宴にあずかるに足るだけの油を持っており、ある者は持っていなかった。その六十六日間は、神の民が日曜法という閉じられた戸に至るまでに印づけられる期間を表している。もし適切な量の油を持っていたなら、彼らは信仰によって至聖所に入った。ホワイト夫人は、終わりの時代に神の民が至聖所に入ることを描き示しており、彼女のアルファの歴史においては、信仰によって至聖所に入ることが生死を分ける試練であった。終わりの時代には、十四万四千人が信仰によって至聖所に入るかどうかを試される。これは再び生死を分ける試練である。

これらの内容は次回の記事で続けます。

神殿の清めにおいて、イエスはご自身のメシアとしての使命を宣言し、その働きを開始された。神のご臨在の住まいとして建てられたその神殿は、イスラエルと世界に対する目に見える教訓となるよう意図されていた。永遠の昔から、輝かしく聖なる熾天使から人間に至るまで、あらゆる被造物が、創造主が内住される宮となることが、神の御旨であった。しかし、罪のゆえに、人類は神の宮であることを失った。悪によって暗く汚され、人の心はもはや神の御栄光を現さなくなった。だが、神の御子の受肉によって、天の御旨は成就する。神は人間のうちに住まれ、救済の恩寵を通して、人の心は再び御自身の宮となる。神は、エルサレムの神殿が、すべての魂に開かれている崇高な天命への絶えざる証しとなるよう定められた。ところが、ユダヤ人は、大いに誇りとしていたその建物の意義を理解していなかった。彼らは、自らを神の御霊のための聖なる宮としてささげることがしなかった。不敬虔な商いの喧騒で満たされたエルサレムの神殿の庭は、肉的情欲と不敬虔な思念の存在によって汚された心の宮を、あまりにも真実に表していた。

世の買う者や売る者を神殿から一掃して清められたとき、イエスは、罪のけがれ——魂を墮落させる地上的な欲望、利己的な情欲、悪しき習慣——から心を清めるといってご自身の使命を宣言された。マラキ書3章1-3節が引用されている。『The Desire of Ages』161頁。

預言者は言う。「私はもう一人の天使が天から降りてくるのを見た。大いなる権威を携え、その栄光によって地は照らされた。そして彼は力強い大声で叫んだ、『大バビロンは倒れた、倒れた。悪霊の住みかとなった』」（黙示録 18:1, 2）。これは第二の天使によって与えられたのと同じメッセージである。バビロンが倒れたのは、「彼女がその淫行の怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませたからである」（黙示録 14:8）。そのぶどう酒とは何か——彼女の偽りの教義である。彼女は第四戒の安息日の代わりに偽りの安息日を世に与え、また、エデンでサタンが最初にエバに語った虚偽——魂の自然不死——を繰り返してきた。これに類する多くの誤りを彼女は広く広め、「人間の命令を教義として教えている」（マタイ 15:9）。

イエスが公の宣教を始められたとき、神殿を冒瀆による汚れから清められた。宣教の働きの最後の行為の一つは、神殿の二度目の清めであった。同様に、世に警告を与え

る最後の働きにおいて、教会に対して二つの明確な呼びかけがなされる。第二の天使のメッセージはこうである。「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその姦淫の怒りのぶどう酒を諸国の民に飲ませたからである」（ヨハネの黙示録14章8節）。そして第三の天使のメッセージの大いなる叫びの中で、天からこう言う声が聞こえる。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、その災いを受けな

いために、彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである」（黙示録18章4、5節）。『セレクトッド・メッセージズ』第2巻、118頁。